

●事例紹介●

ボランティアを問いなおす
～市民教育との接点～

川上 文雄

(奈良教育大学教授)

一九九九年から二〇〇〇年にかけて一〇か月ほど、アメリカのプロビデンス大学においてサービス・ラーニング(以下SL)の調査・研究を行い、帰国後一年を経た二〇〇一年度よりSLの授業を開始した。科目の名称は「ボランティアを問いなおす」、教養科目群の一つとして一・二年度に配当された科目(導入教育科目)である。

私の勤務する大学では導入教育科目の充実をめざしており、「現代的課題に対応する導入教育科目群の展開—『考える力』『表す力』の育成をめざした教育者の養成—」が文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された(二〇〇三年度)。このプログラムは全学展開の授業科目を対象としており、「ボランティアを問いなおす」はこれに該当しないが、私としては大学の基本方針を視野

に入れて授業内容・方法の改善に努めている。

本稿では、紙幅の制約上、SLに対する私個人の姿勢、とくに「問いなおす」に込めた意図について述べるにとどめたい。私は政治学を専門とする者として、つねに市民(政治)教育を意識してSLと取り組んできた。「ボランティアを問いなおす」ことは、ボランティアと市民教育の接点をさぐることである。

アメリカをモデルとすることの難しさ

アメリカのSLにおける有力な立場の一つは、大学の所在する地域、とくに経済的・社会的な困難を抱える地域への支援活動を行いながら、社会的正義について考察し、社

会変革を展望するとういうものである。この場合の支援活動は、個人的に余裕(自由な時間など)のある学生が、個人として困難を抱える人びとを支援するというものでなく、活動自身が社会構造の変革に結びつくものであることが望ましい。また、個人対個人の支援活動の場合であっても、授業においては個人的な困難を社会構造の問題として捉えるように学生は促されるのである。プロビデンス大学のSLプログラムも同じ立場であった。これは市民活動にもとづくSL、市民教育としてのSLといえる。ただし、市民とは「ある社会的理念・価値観・目的のもとに行動する人々」のことである(吉永宏『響きあう市民たち』)。

日本においても、社会的弱者への支援活動を社会的視点から行う市民教育としてのSLは十分に意義があると思われる。とはいえ、いろいろな環境の違いから、アメリカのSLをモデルとすることに、私は困難を感じた。密度の高いアメリカのSLは、強力なNPOの存在、それとの連携、そして授業期間中の学業への専念、さらに住居(大学キャンパス内の宿舎)、教室、活動の現場が近接していることなどの条件のもとでこそ可能なのである。

そこで、社会的視点・市民教育の立場は放棄せず、徐々にその方向に進むことにして、とはいえ、実際には市民教育についての見直しなしに、帰国して一年後の二〇〇一年度後期からSLの授業を始めた。当時の科目名は現在と異

なり「ボランティア」であった。学生には「困った人を助ける」こと以外の次元に気づきながら、ボランティアとはなにかについて、自分自身の答えをみつめてほしいと思っただ。それが私の期待する意味で市民的(社会的)であるかどうかは別として。

市民活動の導入

やがて転機が訪れる。大学の所在地と同じ奈良市内にある「たんぼほの家」という組織のスタッフが中心となり「エイブル・アート連続ワークショップ」(全四回)を開催することになった。エイブル・アートは知的・身体的な障害をもつ人々のアート活動であり、「たんぼほの家」はその活動で全国的にも知られている。そのスタッフが「養護学校でもない、施設でもない、作業所でもないふつうにいるいろいろな人がいる環境のなかで、楽しそうに活動している、そんな風景を実現したい」、そこで、大学の自然環境教育センター・実習園(農場)を使ってワークショップを行いたい、私に話を持ちかけてきた。その協議を通じて、学生たちが企画段階の話し合いとワークショップ当日の運営に参加することになった(なお、この企画はトヨタ自動車のエイブル・アート協賛事業の「自主企画 五地域」の一つに選ばれた)。

学生の活動には、ワークショップの現場で障害のある人

を介助する仕事も含まれる。しかし、今述べたワークショップの趣旨に呼応した活動という意味では、ささやかではあるが、地域社会のあり方を変えていくことを視野に入れた活動である。それは、私の師である政治理論家シェルドン・ウォリン(Sheldon Wolin)の見方を借りれば、「共に社会のなかで生きる」という人間のありかたをよい状態に保つ、あるいはそのように変えるための、「気配りと活動」である。

こうして、二年目の二〇〇二年度は市民活動にもとづくSLとなった。二〇〇三年度も「たんぼの家」の利用者八人の絵画作品展を、スタッフの協力を得ながら、学生主催で実現した(会場は大学内の施設)。作品のすばらしさを実感した学生たちは、それをほかの人たちにも享受してもらいたいと願い、作品展を企画した。これは、障害をもつ人々がアート活動を通じて社会貢献をするという、障害者の社会における位置づけに関わる活動であり、その意味で市民活動である。ボランティアについて、私の学生の多くが抱くイメージは、個人に対する介助などの支援活動である。市民活動を通じてボランティアを問いなおすこと、それを学生には期待している。

「ボランティアを問いなおす」ことへの学生の関心

とはいえ、実際の授業はそのようには進めていない。学

生に強く求めるのは、自分なりにボランティアについて考えてきたことを基礎として「ボランティアを問いなおす」ことであり、「市民教育としてのSL」に照らして問いなおすことではない。学生の現在の意識・関心に根ざした問いに導くほうが、授業への親近感が高まり、学びの密度も高まると思うからである。

それでは、受講生のボランティア意識はどのようなものか。注目したいのは、かなりの学生が「自分自身の活動としてのボランティア」という意識をはっきりと持っていないことである。ボランティア活動は、社会的な認知を受け、よいこととして価値付けされている。このことは、学生にとつて活動への誘引の一つである。他方で、学生仲間との付き合いのなかで、ボランティア活動をしていない者からは、よいことをしているが特異な人間として見られている、あるいは見られていると感じている。学生は社会的ではあるが観念的な認知と、現実的な学生仲間からの認知のギャップのなかにいる。

これについては、受講生による授業の感想が参考になる。一年目の授業が終り、それを振り返りながら、「ほかの学生のボランティア観を聞けたことがよかった」、「もっと聞きたかった」と何人かの学生が書いたのである。授業で私がしゃべりすぎた——市民教育としてのSLについても語ったことであろう——という感想と合わせると、学生の求

めているものは何かが分かる。社会的に認知されているという建前だけではリアリティを感じられない。ボランティアという自分の世界のリアリティを感じるために、ほかの受講生の考えを聞きたい。これは、仲間と同じ考えなら安心できるという、同調的な姿勢で聞くのではない。

現在、私は自分の授業の意義を「問いなおす作業を含めてボランティア活動がリアリティを持つような場を提供すること」と考えるようになっていく。振り返ると、二年目のワークショップのことも、そのような考えで説明できる。そのとき私は、いかにも「ボランティア活動をします」という状況にいきなり学生を投げ込まないような配慮をした。第一回のワークショップでは、事前の企画会議に臨席してもいいが、当日はワークショップの運営には関与せず、一般人として参加する。そのほうが、気楽だし、次回の企画を考えるうえで参考になる、と考えたからであった。学生の感想を読むと、この配慮がおおむね好評であったこと、また、「ボランティアを問いなおす」ためのしかけとして意義があったことが分かった。

外部の社会から来る——しばしば窮屈に感じる——ボランティアのイメージから自由になり、自分の力で、また仲間と協力しながら、ボランティアを問いなおす。これにより自ら社会に向き合う手がかりを得るのであれば、それは市民への成長の一段

階として重要であり、そのような場を提供するSLには市民教育との接点があるといえる。

サービス・ラーニングと「市民としての大学教員」

私はできるかぎり、SLを地域社会に根ざしたものにしていきたいと考えている。なぜなら、そのようにすれば大学教員が地域社会の団体・スタッフと緊密に協力する姿を通じて「市民としての大学教員」を学生に印象づけることができる。市民教育の観点からは大いに意義があると思うからである。もっとも、これは、学生だけでなく私自身にとつての市民教育でもある。さいわい大学の理解を得て、二〇〇四年度後期からは「非営利組織論実習」が開講される。これは「たんぼの家」常務理事の方を講師として提案したものである。この科目と私の担当する科目を有機的につなげるために、話し合っていた。

だれかに頼まれて始めたのではない、いわばボランティアとしてのSL。それをどのようなものにしていくか。「ボランティアを問いなおす」は学生だけでなく、私自身への問いかけでもある。